

物書同心居眠り紋蔵

ちよの負けん気 実の父親

あとし
たぬって
？

佐藤雅美





講談社文庫

ちよの負けん気、実の父親

物書同心居眠り紋蔵

佐藤雅美

講談社

著者 | 佐藤雅美 1941年1月兵庫県生まれ。早大法学部卒。会社勤務を経て、'68年からフリー。'85年『大君の通貨』で第4回新田次郎賞、'94年『恵比寿屋喜兵衛手控え』で第110回直木賞をそれぞれ受賞。主な作品に『手跡指南 神山慎吾』『官僚川路聖謨の生涯』『江戸繁昌記 寺門静軒無聊伝』『信長』『青雲遙かに 大内俊助の生涯』『覚悟の人 小栗上野介忠順伝』『十五万両の代償 十一代将軍家斉の生涯』『千世と与一郎の関ヶ原』『戦国女人抄おんなのみち』など。近著に『男嫌いの姉と妹 町医北村宗哲』『たどりそこねた芭蕉の足跡 八州廻り桑山十兵衛』『一石二鳥の敵討ち 半次捕物控』『頼みある仲の酒宴かな 縮尻鏡三郎』『へこたれない人 物書同心居眠り紋蔵』などがある。

ま き じつ ちちおや
ちよの負けん気、実の父親

さ どうまさよし
佐藤雅美

© Masayoshi Sato 2014

ものかきどうしん い ねむ もんぞう
物書同心居眠り紋蔵



講談社文庫

定価はカバーに
表示してあります

2014年5月15日第1刷発行

発行者——鈴木 哲

発行所——株式会社 講談社

東京都文京区音羽2-12-21 〒112-8001

電話 出版部 (03) 5395-3510

販売部 (03) 5395-5817

業務部 (03) 5395-3615

Printed in Japan

デザイン——菊地信義

本文データ制作——講談社デジタル製作部

印刷——中央精版印刷株式会社

製本——中央精版印刷株式会社

落丁本・乱丁本は購入書店名を明記のうえ、小社業務部あてにお送りください。送料は小社負担にてお取替えます。なお、この本の内容についてのお問い合わせは講談社文庫出版部あてにお願いいたします。

本書のコピー、スキャン、デジタル化等の無断複製は著作権法上での例外を除き禁じられています。本書を代行業者等の第三者に依頼してスキャンやデジタル化することはたとえ個人や家庭内の利用でも著作権法違反です。

ISBN978-4-06-277835-0

目次

真冬の海に舞う品川の食売女めしうりおんな

7

象牙の撥ばちと鬼の連れ

57

みわと渡し守

107

磔はりつけになる孕はらんだ女

159

取り逃がした大きな獲物

207

中秋の名月、不忍池池畔の謎

257

孰たれか微生高びせいこうを直ちよくなりと謂いうや

305

ちよの負けん気、実の父親

357



講談社文庫

ちよの負けん気、実の父親

物書同心居眠り紋蔵

佐藤雅美

講談社

目次

真冬の海に舞う品川の食売女めしうりおんな

7

象牙の撥ばちと鬼の連れ

57

みわと渡し守

107

磔はりつけになる孕はらんだ女

159

取り逃がした大きな獲物

207

中秋の名月、不忍池池畔の謎

257

孰たれか微生高びせいこうを直ちよくなりと謂いうや

305

ちよの負けん気、実の父親

357

ちよの負けん気、実の父親

物書同心居眠り紋蔵

真冬の海に舞う品川の食売女

めしうりおんな

「恐れながら申し上げます」

日ごろはつぎからつぎへと各種の届けや願いに訪れる人でごつたがえす当番所も、
こうも寒いとさすがに足が鈍るのか閑散としており、紋蔵は欠伸を噛み殺したところ
だった。

「申せ」

当番与力の助川作太郎が応じて、紋蔵は筆を持った。

「大坂にて心学講釈をしております。玉田主計と申します。江戸にまいってから昨日
今日と、八丁堀稻荷の社家松木伊織殿方に泊めていただいております」

「八丁堀稲荷というのは湊みなと稲荷のことだな」

「さようでございます」

八丁堀の東南にある、稲荷橋を渡った先からの、江戸前の海に面した海岸沿いを通称鉄砲洲てつぱうずといっており、かかりのところにある稲荷社を湊稲荷とも八丁堀稲荷ともいっていた。伊勢屋いせや、稲荷に犬の糞くそというくらい、江戸に稲荷社はごろごろあつたが、八丁堀稲荷は祭主さいしゅが神主かみぬしというまああの格式の稲荷社だった。社家は禰宜ねぎなどおなじ。神主の下で働く神職しんしよくの総称。

「申せ」

「わたしは十年前まで、八丁堀稲荷に近い幸町さいわいちやうに住んで心学講釈しんがくこうしゃくをしておりまし

た」
神しん・儒じゆ・仏ぶつの三教を融合してあらたな教旨を立て、それを平易な言葉と通俗な譬えたとで説いた一種の庶民教育を心学しんがくといった。

「とはいえそれで口を糊のりするには程遠く、ほとほと食うに困っておいりました」
専業で食つていけたのは中沢道二なかざわどうじなどごく一部の心学者たちだけだった。

堪忍かんにんのなる堪忍は誰もせめ

ならぬ堪忍するが堪忍

堪忍ができる堪忍なら誰でもする。できぬ堪忍をするのが本当の堪忍である。

これは中沢道二が唱えた有名な人生教訓で、心学はだいたい「ならぬ堪忍するが堪忍」というような俗耳ぞくじに入りやすい人生教訓を説いた。

「そんなころ、十年前のことです。大坂に心学講釈の社しゃがあり、そこに潜り込むとなんとか飯めしだけは食えろと聞き、上方かみがたにでかけていきました」

社とは団体のこと。

「そこではしち難しいことを申しません。落し咄おとばなしなどからネタを拾い、かみ砕いて面白おかしく講釈しておりましたから、寄席よせからも声がかかるほどでした。なるほど、そんな手もあるのかとわたしも合点がてんがいき、見様見真似みようみまねでやって、四、五年くらいかかりましたがなんとか一人前になり、食っていけるようになりました」

羅紗らしやの膝掛けの中に行火あんかを潜り込ませ、手を突っ込んで肩をすばませていた助川作太郎がいらだつていう。

「なにがいいたいのだ。ここはおのれの来し方を語るところではないぞ」

「失礼しました。先を急ぎます。わたしには一人娘がおりました。ですが、貧乏のどん底にあえいでいたこととて、大坂に連れていくことができません。そこで当時、八丁堀稲荷の社家みずしまいずもをしておりました水島出雲殿に養女にもらっていたいただきました。わた

しがいま泊めていただいております松木伊織殿は水島出雲殿の後任の社家です」

「くどいなあ」

「申しわけありません。かいつまんで申します。このほどわたしは、水島出雲殿の養女になつてゐる娘に会ふのを楽しみに、十年ぶりに東に下つてまいり、八丁堀稲荷を訪ねました。出雲殿は辞めて、おなじ家に松木伊織殿が住んでおられる。出雲殿はどこへいかれたのですかと尋ねました。伊織殿のいわれるのに、江戸橋広小路の翁稲荷の祠守をなさっておりますと」

「齒痛に効くと評判の稲荷社のことだな」

「わたしはいつこうに存じませんが、伊織殿もさようなことをおつしやつておられました」

「先を急げ」

寒いのも玉田主計のせいのように思えてきて、助川作太郎はいらだつ。

「それで、すぐにも出雲殿を翁稲荷社に訪ねようとしたところ、伊織殿がお待ちなさいと。出雲殿に預けた娘さんを訪ねてみえたことです。出雲殿は五年前に、たぶんその娘さんをでしよう、品川は歩行新宿の旅籠屋に飯盛奉公にだしておられますと。品川の旅籠屋の飯盛奉公というと、ご存じのように遊女奉公です。あわれにも

娘は遊女として叩き売られておりました」

飯盛奉公は食売女奉公とも書く。
めしうりおんな

「出雲は」

と今度は呼び捨てにして、

「実の親のわたしになんの相談もなく、養親としてあるまじき不埒^{ふらち}を仕出^しかしておつたのです。どうか、出雲をこちらにお呼び出しになって、きつく御仕置^{おしおき}を御命じくださいませ」

「そのことだかのオ」

助川作太郎がいつそう肩をすぼめていう。

「その儀は訴えても受けつけぬことになっておるのだ。のオ、藤木^{ふじき}」

「はい」

「説明してつかわせ」

ちぢかむ手を必死に動かして筆記していた紋蔵は筆を止めていった。

「おさだめがき
『御定書』、知っておられるな」

「はい」

幕府の民事法と刑事法をゴつちやまぜにした法典だ。

「その四十六の条にこうある。軽キものが養娘を遊女奉公にだしたとして、それを実方より不届きであると訴えたとしても、御番所（町奉行所）は取り上げない。軽キものというのは、暮らし向きに追われている者といったらいいだろう。実方とは養女にだした側だ」

玉田主計は膝をすすめていう。

「なぜですか。根拠をお聞かせください」

「養娘を遊女奉公にだすような養親はそもそもが貧しく、そんな貧しい者に娘を養女にだすということは、先々、遊女奉公にだされるかもしれないというのを覚悟してのこと。お上はそう考えられて四十六の条を立てられたのだ。だからたとえ、遊女奉公なんかにだしませんという証文をとっていたとしても文句はいえない。但し書きにそうある」

「養親はそもそもが貧しく云々とおつしやいましたよねえ」

「申した。正しくは卑賤の者とある。卑劣の卑に貴賤の賤だ。それを貧しい者と分かりやすくいいなおした」

「八丁堀稲荷の社家だった水島出雲は娘を養女にだした当時、裕福ではありませんでしたが、さりとてとりわけ貧しい者でも、卑賤の者でもありませんでした。娘を遊女